『東海道四谷怪談』私見

本間正幸

一、お岩髪梳き

第一化粧のたしなみは早朝の事也。人いまだしづまり鶏の鳴比おきてくちすゝぎ顔あらひ髪ゆふ事。貞女の作法にて聖人の礼記にてをしへ給へり。人にねがほながら見せ乱髪して寝より出るはつたなく賤しき事也。（貞享四刊『女用訓蒙図彙』）

お岩の髪梳きはやはり常軌を逸した行為と言わざるをえないであろう。まずその時刻といえば早朝ならぬ夕刻であり、産後の肥立ちを患うお岩には「はやく櫛けする事」すら控えねばならない事柄であった（元禄十刊『嫁娶重宝記』巻之二）。加えて鉄漿付けといえば、まさに禁忌にも相当する事柄であったはずである。[1]

夕暮、それは「逢魔が時」と呼ばれるように昼と夜、日常と非日常が交叉し、せめぎ合う、異界への予兆を秘めた時刻である。思えば『女殺油地獄』（近松門左衛門作　享保六初演）でお吉が娘の髪を梳き上げたのもこの時刻であり、「手が油になってしまった」お吉が油の中で惨殺されるのはそれから間もない闇の世界においてであった。[2]お岩もまた、程なく闇の住人と化す運命を背負わされている。時刻といい、毒薬によってもたらされた「たゞならぬ」顔の構えといい、お岩髪梳きは此岸から彼岸への移行を予兆する要素に満ち溢れていると言うべきであろう。

お歯黒ひとつを例に取っても、それは浮世絵の美人画とともに、それとは正反対の異界の者の形相を我々に連想させる。寛文三年刊『曾呂利物語』には足高蜘の化身である「六十許りなる女」が「鐵漿をつけ髪のかすかに見えたるを四方に亂し」、男を見て「けしからず笑ふ」場面（巻二ノ四）が収録されているし、延宝五年刊『宿直草』には嫉妬に焔られる「二十ばかりの女」が「白き装束に乱れ髪にて、苦しげに立ち、鉄漿黒き口より、息吐く度に火焔」を吐き出すという話（巻三ノ一一）が見受けられる（以上、引用は岩波文庫本『江戸怪談集』による）。西鶴の『好色一代女』（貞享三刊）には「歯黒つけたる口に漢竹の楊枝使う」という諺がうかがわれるが、これもその意味は「嫉妬に燃えて、恨みある女をのろうことにいう」

（『故事俗信ことわざ大辞典』小学館）ものであった。

お岩髪梳きの典拠は、南北の作では『阿国御前化粧鏡』（文化六初演）に定められており、またお岩の相好に山東京伝作『八重霞かしくの仇討』（文化五刊）の鵜の羽の影響を見る向きもある。[3] 鵜の羽（図A）もまたお歯黒姿の怨霊であるが、これなどもその原型は怪談小説類に頼ったものであろうし、中でも鳥山石燕画『画図百鬼夜行』（安永五刊）に描かれる青女房なる妖怪はこれらの造型に大きく関与したものと推測される。（図B）青女房とは「ぼう〳〵まゆに鉄漿くろ〳〵とつけて立まふ人をうかがふ」女官姿の妖怪であり、「荒たる古御所」に住みつくと同書には記されている。室町期に物されたと推定される『百鬼夜行絵巻』（伝土佐光信画）にも青女房の姿が表されているが、これもやはり御所らしき背景の中に描き出されている。（図C）『阿国御前化粧鏡』にしても『八重霞かしくの仇討』にしてもその舞台は武家社会に設定されてはいるが、女主人公が住居とする荒廃した家屋は青女房の住みかとしてまさに適ってもいよう。お岩がお歯黒を口に含むこの場面は、婦人の早朝の嗜みを衆目に晒すという南北の露悪趣味にとどまらず、お岩が異界の者へと姿を変える儀式としても設定されているのである。

『東海道四谷怪談』（以下、時に『四谷怪談』と略す）には先行作と目されるものが既に幾つか指摘されているが、それらの中で実録本『四谷怪談』（ただし、成立年不明。以下『実録』と記す）と、柳亭種彦の『近世怪談霜夜星』（文化五刊）にはお岩（『霜夜星』ではお澤。ここではお岩で統一する）が化粧をする場面が描かれており、これらもお岩髪梳きの典拠として注目されるべきであろう。

・朝より部屋に入って澁紙の如き顔に粉黛悉く納め、衣類も得ならぬ香りをこめ、（中略）黄昏時に及び且明るき方を後にして、打傾ぶきて居たりけり…

（『実録』―近世実録全書第四巻による）

・澤子も今日を晴れと醜き面に粉黛をいろどり、嫁衣裳まとひしさまは、清少納言が冬の月にたぐへし、老女の化粧はものかは…（『霜夜星』二巻―近代日本文学大系第十九巻による）

いずれも伊右衛門（『霜夜星』では高西伊兵衛。やはり伊右衛門で統一する）との婚礼当日の様子を描いた部分であるが、『霜夜星』のお岩の描写にはさらに「黒き歯の斑なるは雪をおびたる烏の如く」なる一文も見られる。南北はおそらくこの場面に想を得、前作『阿国御前化粧鏡』で当たりを取った鉄漿付けの場面を『四谷怪談』に採用したものであろう。

つまり、お岩髪梳きは美女お岩が『実録』、あるいは『霜夜星』の歯黒女お澤へと姿を転じる儀式としても成立しているのであり、伝説上の悪女へと相好を転じるこの場面に至って、初めてお岩の怪異譚は幕を開けると言うこともできる。

二、蛇と鼠

『東海道四谷怪談』二幕目―元の浪宅の場。伊右衛門への一念から闇の住人と化したお岩と従僕の小平は、それぞれ鼠・蛇に姿を変えて伊右衛門の身辺を脅かすことになるが、これもその筋は『実録』『霜夜星』に取材したものと考えられる。

従僕の小平はソウキセイなる伝家の良薬を盗んだ咎により、伊右衛門一味から指折りの刑に処せられた挙句、お岩殺しの濡れ衣を着せられて斬殺される。[4] 死後、小平の折られた指先は蛇となってうご

めき、伊右衛門たちを脅かすわけだが、この趣向は『発心集』第五「母女を妬み、手の指蛇に成る事」に先例が見られる。元禄年間刊行の『善悪報ばなし』巻五の五「女房、下女を悪しくして、手の指ことごとく蛇になる事」にも類話が見受けられるが、両者とも嫉妬に狂った女性が蛇に指先を変えている点が興味を引く。

新潮日本古典集成本の頭注は類例として、山東京伝の『桜姫全伝曙草紙』（文化二刊）、南北の『阿国御前化粧鏡』『隅田川花御所染』（文化十一初演）で髪の毛や指先が蛇となる趣向を掲げるが、これも蛇となる主体はほかならぬ女性である。類例はほかにも怪談小説類に多く見受けられるし、式亭三馬の『戯場訓蒙図彙』（享和三刊）には「当国（芝居国―引用者注）の蛇、短くて太し。色、萌黄なるもの多し。女の髪、また帯など、化して蛇となることあり」（『歌舞伎の文献』三による）の記載も見受けられる。

また、越中婦負郡野積村地方には次のような民間伝承も残されている。

女子の胸の裡には一つの血ノ池があつて、之に小蛇が棲んでゐる。此池の血が月々流れて下りるのを月経と云ふ。小蛇が女子の胸へ棲み込むのは十四五歳になつて、少しく春情が萌した頃であるが、小蛇が棲み込むと女子に嫉妬心が起り種種なる邪推を廻し、此儘にして置くと女子の成長すると同時に小蛇も成長し、女子を生きながら大蛇に化身させてしまう。……

（中山太郎編『日本民俗学辞典』による）

これもまた嫉妬に苦しむ女性が胸に棲む小蛇を蠢動させるというものであり、一般的連想では、男性よりも女性が蛇に化す方が自然であったことがわかるし、実際、『実録』『霞夜星』ではお岩が蛇に姿を変えているのである。両書においてお岩は鼠・蛇両方の役割を一人で演じており（『実録』では猫にも）、これによって、ここは小平がお岩の代行役を勤めていることがわかる。

しかしそれはこの場に限ったことではなく、そもそも『四谷怪談』の最初からお岩・小平は同一人格に設定されているのである。伊右衛門を軸にお岩は貞淑な妻、小平は忠実な家僕と対照的に描かれているし、両者の身の果てにはいずれも不義の名を被せられた死が待ち受けている。両者とも伊右衛門から拷問に等しい仕打ちを受けている点でも共通性がうかがわれる。二幕目―浪宅の場において小平は指折りの刑に処せられているし、一方のお岩も元の浪宅の場において、蚊帳を質屋に運ぼうとする伊右衛門と揉み合ううちに爪をはがされ、指先を血に染めることになる。両者とも指先に苦痛が与えられるという対照が図られているし、死の原因に薬が関係していることも両者の共通点として掲げることができよう。お岩が喉を切りさかれることになる刀もまた、ほかならぬ小平の忘れ刀であった。このような両者の関係を最も象徴的に表しているのは三幕目の戸板返しの趣向であり、お岩・小平が表となり裏となり姿を表すさまは、まさに鼠・蛇が一対となって出現するさまに照応を見せている。

しかし、なぜここで小平は鼠ではなく蛇の役割を担わされたのであろうか。死後鼠と化し、多数の鼠を操ったことでは『平家物語』（延慶本）や『源平盛衰記』に登場する頼豪阿闍梨が有名であり、（図D）ここもその俤が強く感じられるからである。頼豪は『昔話稲妻表紙』（京伝作　文化三刊）、『頼豪阿闍梨怪鼠伝』（馬琴作　文化五刊）など、しばしば話の材に取られており、前掲『八重霞かしくの

仇討』もその例に加えられる。ここでは鱗右衛門なる武士が死後鼠と化し、娘小園の危難をしばしば救っているが、これも「むかし三井の頼豪阿闍梨は、怒りの魂魄、鼠と化して経巻を食ひ裂きたる例あり。いま鱗右衛門が魂魄、鼠と化したるは、子を思ふ親の心の切なる故と思へば、いとゝ哀れぞまさりける」（江戸戯作本による）と記されるように、頼豪を材としたことは明白である。つまり、鼠・蛇どちらかを小平に代行させるにしても、女性のお岩を蛇に、男性の小平を鼠に設定するのが一般的連想に適っていたはずなのである。にもかかわらず、敢えてそれを逆転させたところは南北の新趣向と言うべきであろうし、実際のところ『四谷怪談』には至る所、この逆転の論理が盛り込まれてもいるのである。

たとえば、二幕目―元の浪宅の場ではお岩の死後、鼠が猫を食い殺すという逆転した怪異現象が発生しているし、美を装うための髪梳きが醜女の相貌を導き出すという趣向も、やはり逆転の論理で貫かれている。従来あまり指摘されることはないが、ソウキセイを廻る興亡もその例に加えられるのではないか。

『本草綱目』によればソウキセイなる唐薬は「桑寄生」の表記で表され、その効能は

腰痛。小兒背強。癰腫。充肌膚。堅髮齒。長鬚眉。安胎。本経。去女子崩中内傷不足。産後餘疾。下乳汁。主金瘡。去痺。別録。助筋骨。益血脈。大明。主懐妖漏血不止。令胎牢固。蘇権。

にわたる。小平の主君・小塩田又之丞が患う「鶴膝風」なる「脚の肉が落ちて痩せ細り、鶴の脚のようになる病気」（古典集成本三〇九頁頭注）に効を奏しそうな要素も見られるが、主たる効能は傍線を施したように婦人の疾患に関するものであり、(5) 実際、近代本草学では専ら婦人薬として取り扱われているのである。

・専ラ婦人薬トシテ用ユ
（小泉栄次郎編『増訂和漢薬考　後編』大正十四年増訂三版）

・くは樹に寄生スル Loranthus Yadoriki おほやどりき＝ほやノ枝葉。婦人薬トス。
（清水藤太郎『本草辞典』昭和十年初刊・同五十二年復刊　原文横書き）

いまだ明証には至っていないが、仮りにこれに従うならば桑寄生はむしろお岩に必要な薬であったことになる。

「ソウキセイ」という片仮名表記をとった理由として、古典集成本の頭注は「大変稀な品で、聞きなれぬ名」（九七頁）であることを掲げるが、『易林本節用集』には「サウキセイ」の訓で掲出され、まったく聞きなれぬ名であったと言うには疑問が残る。ここはむしろ実在の桑寄生を架空の薬として虚構化する意志を読みとるべきではないか。おそらく南北は桑寄生の素姓を知るものにのみ、お岩が必要とする婦人薬を小平・伊右衛門ら男性陣が争奪し、お岩には毒薬が仕向けられるという逆転した趣向が了解されるよう仕組んだものであろう。

渡辺保氏は『四谷怪談』劇のおもしろさを「女にとって敵討ちとはなにかを描いたところ」に認めておられるが（「忠臣蔵伝承の荷い手たち―徂徠、仲蔵、南北、九代目団十郎、雲右衛門、青果など」『国文学』昭61・12）、本来男がいだくべき仇討の志を女であるお岩にいだかせたところにも逆転の論理を読み取ることはできる。

服部幸雄氏の「さかさまの幽霊」（『文学』昭63・4初出。イメージ・リーディング叢書『さかさまの幽霊』平凡社・平1に再録）

によれば、「『さかさま』には日常的な平穏や無事に向けて闘いを仕かけるデーモンの激しいエネルギーが鬱積している」とのことであり、二幕目の鼠が猫を食う場面、あるいは妻・従僕が主人を仇討ちにするという筋を例に「鶴屋南北が日常ならざる〈怪異世界＝デーモンの支配する世界〉を象徴する記号として、この『さかさま』を発想したことは否定できない」としておられる。

小平の霊威は伊右衛門を脅かすにとどまらず、伊右衛門の新妻お梅の祖父である喜兵衛に憑依し、お岩との間に生まれた乳児を食い殺すに至る。これも『実録』『霜夜星』ではお岩の所業として描かれており、ここも小平が代行役を勤めていることがわかる。両書では鼠と化したお岩の霊魂が毎夜伊右衛門の寝床に現れ、耳の傷口を甜め続け、爛死させる筋になっているが、南北は小幡小平次の怪異譚にのっとり、甜め殺す筋を屏風の陰で食い殺す筋に改めたものであろう。[6] 両書では伊右衛門のみならず、新妻との間にできた子供も変死させられているが、[7] ここは伊右衛門の代りに子供のみが殺されるはめになっており、しかもそれが新妻との間にではなく、お岩との間にできた乳児に設定されている点には注意する必要がある。『実録』『霜夜星』で両者の間に子供はなく、『四谷怪談』のみが二人の間に乳児を設けさせているのだが、その意図は、お岩自らの意志で我が子を食い殺させるという、この戦慄的な場面を現出させることにあったと考えられる。二幕目の前半で慈母の表情を湛えていたお岩も、髪梳きを経て我が子を食い物にする悪鬼へと変貌を遂げることになるのである。

この怪異の舞台となった雑司ヶ谷といえば鬼子母神堂が名所として広く知られているが、四谷町と鬼子母神堂は目と鼻の先であるが、仏に帰依することによって保育の神へと昇華する。慈母の顔から我が子を食い殺す悪鬼へと転落するお岩はまさにこれとは逆の経緯を辿っているわけであり、お岩の相好に鬼子母神の影を読みとることが可能であれば、このお岩の設定にも南北の逆転の論理が秘められていると言うことができよう。

点、二幕目前半のお岩の姿に産育の神・鬼子母神の俤を見ることはできないであろうか。[8] 鬼子母神はそもそも他人の子を食い殺す邪鬼であるが、仏に帰依することによって保育の神へと昇華する。慈母の顔から我が子を食い殺す悪鬼へと転落するお岩はまさにこれとは逆の経緯を辿っているわけであり、お岩の相好に鬼子母神の影を読みとることが可能であれば、このお岩の設定にも南北の逆転の論理が秘められていると言うことができよう。

三、姿見川

『四谷怪談』二幕目―元の浪宅の場。お岩と小平の死骸を両面に打ち付けた戸板は雑司ヶ谷四谷町から南へ下った姿見川に投げ捨てられる。これは「當時、山の手邊に住む、ある旗本の妾が、中間と通じて露見し、男女は一枚の戸板に釘づけにされ、なぶり殺しにされて、神田川へ流された」(岩波文庫本解説)という市井の噂に材を求めたとされており、実際『実録』『霜夜星』にこの部分は見られない。しかし、ここで南北はそれに加えて、二幕目の舞台となった雑司ヶ谷の故事をも取り込んでいるように見受けられるのである。

酒井忠昌は『南向茶話』(寛延四刊)に、明応ごろ、小川左衛門次郎義治の妻於戸姫が凶刃に斃れた夫の敵を従者とともに討ち、「変りぬる姿見よとや行水に移す鏡の影に恨し」という歌を残して姿見川に入水した話を録し、これがこの川に掛かる姿見橋の由来になったと記している。「変りぬる姿」とはこの場合自らの運命にやつれ果てたたたずまいを意味するが、南北はこれを踏まえ、実際に顔形が変わり果てたお岩を入水させたものと考えられる。下の句「移す鏡の影に恨し」には、毒薬で変わり果てた顔を鏡に写し、「コリヤ

コレほんまに、わしが面がこのやうな、悪女の顔になんでまあ、コリヤわしかいの〳〵」と繰り返すお岩の歎きを重ねて見ることもできるし、従者とともに敵を討つという筋に『四谷怪談』との共通点を見出だすことも可能である。

明和二年に刊行される同書の追考には姿見橋に、もうひとつ故事が付け加えられることになる。曰く、

大猷公（家光―引用者注）此辺御鷹野の節、御鷹それけるを、此橋の辺迄は、御鷹の姿を見けるゆへ、御鷹匠やう〳〵したひ来り、御鷹を得たり。御悦にて以後此橋を姿見と申べしとの御上意の由、早稲田の古老の物語也。（日本随筆大成本による）

これもまた姿見橋の由来譚であり、こちらは『江戸名所図会』にも引用されている。家光の高田への鷹狩りは『徳川実紀』によれば、寛永十三年から十七年までの間に二十回近くにのぼる。これなどはその事実を基に「野守の鏡」の故事から仮構されたものであろうが、こちらの故事も『四谷怪談』五幕目―夢の場に取り込まれていると考えられる。

今日夢の場の舞台は、八代将軍吉宗が享保年間に鷹狩を催した記録から深川一帯と推定されている（古典集成本三五七頁頭注）が、必ずしも吉宗の故事に限定される必然性はないし、伊右衛門がお岩との出会いを夢見るならば、むしろかつて生活を営んだ雑司ヶ谷を連想するのが自然であろう。伊右衛門の意識はこの故事に設定された寛永ごろの時空に遡り、雑司ヶ谷の在郷娘お岩との出会いを夢見ているのではないだろうか。

師直の書物で出世した伊右衛門は長兵衛を従者に鷹狩に出るが、伊右衛門の鷹は逸れて一軒の百姓家に入る。鷹の姿を追い求める彼はそこで「以前に変らぬ妻のお岩」に出合うことになる。鷹が逸れたことがきっかけで或る人物に出合うという設定は『梅柳若葉加賀染』（文政二初演）でも用いられており、珍しいものではないが、類似した故事が雑司ヶ谷に伝えられることは興味深い。これに当てはめて解釈するならば、お岩の百姓家は姿見橋付近に位置することになるからである。

嘉永年間の切絵図（近吾堂版）を見ると、四谷町付近には武家屋敷が散見されるものの、姿見橋の周辺にはこの時期に至ってもまだ田家が見られ、ここでの百姓家の設定に符合する。また、夢の場では蛍が背景に登場し、季節感を高めているが、これも姿見川付近の名物にほかならない。『江戸名所図会』の「落合蛍」の項には「この地（落合―引用者注）は蛍に名あり。形大いにして光も他に勝れたり。山城の宇治、近江にも越えて、玉の如く又星の如く乱れ飛んで、光景最も奇とす」と記されている。落合は姿見橋より二キロ程西方に位置するが、神田上水（姿見川）の周辺であれば、雑司ヶ谷でも蛍を目にすることはできたはずである。

そしてもしこの百姓家がそこに位置するとすれば、在郷娘のお岩は自分の死骸が投げ捨てられた川のほとりに居を構えていることになり、ここに「以前に変らぬ妻のお岩」が此岸ならぬ存在であることが予感されることになる。実際それに違わず、伊右衛門が浮気心をちらつかせるや否や、彼の鷹は瞬時に鼠と化し、お岩は死霊の姿に変貌を遂げる。七夕風物を美しく彩っていた蛍も一斉に火の玉に転じて、伊右衛門を取り囲み、寛永頃に設けられた時空は一瞬にして現在の四谷へと移行することになる。

伊右衛門の夢は散じて、百万遍念仏の中、藪の内蛇山庵室に身を

横たえる自らの位置を確認することになるが、この庵室の外には産褥で死んだ女を供養する流れ灌頂がしつらえられており、夢の場自体もまた新たなる怪異出現の予兆としてその機能を果たしているのである。(9)

四、初演と再演

以上見てきたように『東海道四谷怪談』それ自体は、さまざまな先行作・故事伝説類の複合体以外の何ものでもない。しかし、それらが錯綜しながらも、散漫な印象を与えないのはひとえに構成に張り廻らされた作者南北の緊密な配慮のなせるわざであり、劇中至る所に盛り込まれた伏線効果もそのひとつとして位置付けられるべきであろう。

たとえば二幕目―浪宅の場で、お岩の様変わりを見た宅悦が油買いを口実にその場を逃れようとする場面。門口で一人言ちてなかなか出掛けようとしない宅悦にお岩は「まだ行かぬかいの」と催足をし、宅悦は何気なしに「ハイ、鼻緒が切れましたから」と返答をする。口から出まかせの言い訳とはいえ、これは不吉を予兆する台詞である。『故事俗信ことわざ大辞典』に「下駄の鼻緒が切れるのは不吉」「出掛けに鼻緒が切れると不吉」という諺が掲げられるように、この台詞は直後に起こるお岩の死を予感させているのである。

また、お岩の死後現れた猫を見た宅悦の台詞に「この畜生め、死人に猫は禁物だハ。シイ〳〵〳〵」というものがあるが、これも同書に「猫が死人をとび越すと死人が立つ」と掲出されるように、以後お岩の亡霊が立ち上がり伊右衛門を苛しめることを予感させたものである。『日本民俗学』（弘文堂入門双書）の掲げるところによれば、猫はそれ自体霊力をもつ動物であり、産室に入れることも死者の部屋に入れることもともに禁忌とされていたという。

これらの台詞は、大阪で再演された際の台本『いろは仮名四谷怪談』（以下『いろは仮名』と略す）ではいずれも削られており、伊右衛門に対してお岩が語る「死ぬる命は惜しまねど、産れたあの子が不憫に思うて、わたしは迷ふでござんせう」も死を予感させる不吉な台詞であるが、やはり削除されることになる。

『四谷怪談』からさらに例を掲げるならば、二幕目―元の浪宅の場で、引越し女房に訪れたお梅・喜兵衛がそれぞれ床に着く場面ということになろうが、これも『いろは仮名』では削られているのである。お梅は赤地錦のお守りを首に掛けてお岩の寝床に臥し、一方の喜兵衛はお岩と伊右衛門との子供を「身どもが今宵は乳のない乳母、かんがく致して寝さしてしんぜう」と抱きあやす。この二人の姿を重ね合わせるならば、安産の魔除けの苧を襟へ引っ掛け、木綿蒲団の上で赤子をゆすぶり付けている生前のお岩の姿が彷彿され、二人に起こる悲惨な出来事が予兆されることになるのである。『いろは仮名』では喜兵衛が赤子を抱くこの場面が削られているにもかかわらず、喜兵衛の顔が小平に変わる瞬間に赤子は腕の中で食い殺されており、やはり唐突の感は禁じえない。もちろん、『いろは仮名』ではこれ以前、鼠が赤子を引いていく場面も削られており、全体的に赤子に与えられた役割も小さいと言わねばならないであろう。

郡司正勝氏は『かぶき―様式と伝承』（寧楽書房　昭29）の中で、『四谷怪談』と『いろは仮名』の違いについて次のように述べておられる。

これ（白藤本を青々園本で補った『四谷怪談』のテキスト―引用者注）を、四度目の上演の際とおもわれる、天保五年の日附のある上方上演本の『いろは仮名四谷怪談』と較べてみると、多少の異同が発見される。すなわち、後者がト書において詳細を極めているという点と、せりふに芝居気が多くなり、「人に恨みがあるものかないものか、檜の木山の火は檜より生ずると、我もこがるる胸のほのふ。思ひしらさん待ていよや」などという、初演本にない凄みのせりふさへ加つて、次第に洗練されると同時に、誇張をも増していつたことがわかる。

（「髪梳の系譜　七、髪を梳く恐怖」）

確かに『いろは仮名』には「首が飛んでも動いて見せるワ」（三幕目―隠亡堀の場、有朋堂文庫『脚本集　下』による）という伊右衛門の名台詞も録されており、「せりふに芝居気が多くな」っていることは諾われるが、一方において『四谷怪談』に見られた伏線効果は、先に触れたように希薄になっていると言わざるをえないであろう。

怪異設定も然り。二幕目―元の浪宅の場でお梅が、亡きお岩の寝床で初夜を迎える設定、これなど、いかにも南北的なグロテスクさを湛えているが、やはり『いろは仮名』には取られていない。『四谷怪談』ではお岩の死後、伊右衛門の浪宅にお梅・喜兵衛が祝言を挙げに来る設定が取られているが、『いろは仮名』では逆に伊右衛門自ら喜兵衛宅に出向く設定に改められているからである。さらに『いろは仮名』では伊右衛門がお梅らを斬殺した後の蛇や心火の怪異も削られており、溯ってお岩の化身の鼠が猫を食うという逆転の怪異もここでは削られているのである。お岩の死後、宅悦がその場から逃げ出す理由も『四谷怪談』のようにその怪異に恐れをなしたわけではなく、「あの様な悪い伊右衛門、又俺が業になるで有らう」と、お岩殺しの犯人に仕立て上げられるのを避けるという人事的理由に改められているのである。

しかし、南北劇の特色はむしろこれら『いろは仮名』が削除した部分に表れていたと言うべきではないだろうか。『四谷怪談』ではこれに限らずさまざまな仕掛けが随所にちりばめられており、それらを解読することが南北の台本を読む興味の一端ともなっているからである。

たとえば、藤八五文の薬売り、ソウキセイ、血の道の薬（実は毒薬）と連続する薬尽しの趣向もそのひとつであるし、喜兵衛の金盥、お岩の「山水なる半挿」、お袖の中盥という盥尽しも同様。冒頭に掲げたお岩の鉄漿付けは序幕お袖が楊枝店に勤める場面に伏線が張られており、二幕目の姿見川へと連想が展開するよう仕組まれている。南北は序幕で楊枝店の客・お槇に「お土産はかやう致しませう。○五倍子に羽根楊枝と房楊枝と…」と語らせているが、五倍子は歯を黒く染める染料であり、羽根楊枝とともに鉄漿付けの必需品である。二幕目の地名によみこまれた姿見（鏡）が広く化粧時に用いる道具であることは言を俟たないであろう。

また『四谷怪談』の題に違わず、四谷尽しの趣向も盛り込まれている。先ず序幕の尾扇の台詞に「四谷町辺に御別荘をもおしつらひなされ…」とあるが、これは二幕目の舞台ともなる雑司ヶ谷四谷町を指しており、同じく序幕で秋山長兵衛が「四谷まで参らば、我に払ってやらうと言ふのだ」と語るのは内藤新宿の四谷町を指している。四幕目のお袖・宅悦の会話にも「モシ、四谷はどの辺にあやしやんしたへ」「水道町の近所さ」と四谷が語れているが、これは

おそらく小石川の四谷町（水道町は関口水道町）を指しているのであろう。四谷とはいっても江戸にはいくつかの四谷町が存在したわけであり、南北はそれらを意図して取り入れることで、江戸の空間性を舞台に現出させていると言える。地名にとどまらず、伊右衛門に殺されるお岩の父親にもまた「四谷左門」なる名前が冠されている。

以上、伏線にしても、物尽しの趣向にしても、それぞれが筋の流れとともにイメージの連鎖を導き出し、ひとつの世界を幻出させるよう配置されているのであり、『東海道四谷怪談』を成立させているのは南北の卓抜した構成力であったと結論付けることができよう。

『いろは仮名』はその粗筋を『四谷怪談』に倣いながらも、細かな趣向をすべて踏襲するのではなく、適宜取捨しているように見受けられる。『いろは仮名』では郡司氏の言われるようにむしろ台詞の芝居性を重視しているようであり、それは『四谷怪談』に比べ、全体的に台詞が饒舌になっていることからも推察されよう。『四谷怪談』再演に至っての改変はこのような細部にとどまるものではなく、そこでは、さらに『忠臣蔵』と『四谷怪談』を交互に行い、二つの世界を交錯させるという、上演形態における南北一代の大仕掛けすら切り捨てられることになるのである。

注

(1) 岩波文庫本（河竹繁俊氏校注）・新潮日本古典集成本（郡司正勝氏校注）の、産褥中の四十九日は穢れがあるとして鉄漿付けも髪結もしない風習であったとする注解に従う。ただし、『嫁娶重宝記』の「産後養生の習食物よしあし」（巻之二）、あるいは『女重宝記』（元禄五刊）巻之三にそのことは記されていない。また、『講座日本風俗史』（雄山閣　昭34）別巻二所収「妊娠・出産・育児の風俗」には「人妻となった女は、必ず鉄漿をつけ、眉を剃り落す風習だったが、実際は妊娠したり、子を産んでから行う者が多かった」と、これに抵触する記載もうかがわれる。

(3) この部分、管家有理氏「歌舞伎における〈髪〉―その機能と意味について」（『近世レポート』第六号　昭63・3）による。なお、『画図百鬼夜行』（安永五刊）にも「逢魔時」は「百魅の生ずる時なり」と記されている。

(3) 『国文学』平1・7臨時増刊号『古典文学作品人物事典』所収「東海道四谷怪談のお岩」の項（古井戸秀夫氏稿）。

(4) 山東京伝の『復讐奇談安積沼』（享和三刊）では小平次の死骸が、殺害犯の一味・左九郎の手首を握って離さないため、小平次の手首ならびに五指が切り離される場面が設けられており（巻之四第七条）、この後、小平次の妻・おつかと夫婦になった左九郎の許へ小平次の幽霊が忍び込む場面でも「裏より屏風の縁にかけたる五つの指、ばら〳〵とこぼれ落ち」る趣向が取られている（巻之四第八条）。『四谷怪談』はこれを踏まえたものであろうか。ただし、『彩入御伽草』（文化五初演）一番目四立目では小平次ではなく、皿屋敷のお菊をモデルとする幸崎が毎日一本ずつ指を切られる刑に処されている。

(5) 宋・郭稽中纂『産育寶慶集』（国会図書館蔵『函海』21の内）に掲げられる「濟危上丹」「延齢護寶丸」などの婦人薬の成分にも桑寄生の名を見出だすことができる。

(6) 『復讐奇談安積沼』巻之四第八条には小平の幽霊が前妻おつかを食い殺す場面が次のように描かれている。

一團の陰火飛入ると見えしが、屏風の裏に阿と叫ぶ聲耳をつらぬき、おぼえず尻居に撞と坐す。こは妻が身のうへにこそと、いそ

がはしく屏風おしのけて見るにお塚は見えず。

（『絵入文庫』第二十一巻による）

また、南北の『彩入御伽草』一番目三立目にも次のようにある。

焼酎火燃え、おとわ（『安積沼』のおつかに該当―引用者注）連理引きにて、蚊帳の方へ引摺られ、一枚折りの屏風の蔭へ倒れる。（中略）正作、屏風を取除けると、おとわの死骸のありゐる。（中略）この時ドロ〳〵、煙硝火立ち、蚊帳の裾より小平次の亡霊、女房の首を抱へ、ぽっと小高く現はれ、女の首を透し見て、にっこと笑ふ。

（『大南北全集』第一巻による）

(7)『実録』では新妻も取り殺されることになるが、『霜夜星』では災厄を免れ、お岩を弔う展開になっている。

(8)『実録』には不幸続きの伊右衛門が「毎月八日廿八日には宗旨なれば雑司ヶ谷の鬼子母神へ懈怠なく参詣す」る様も描かれている。

(9)郡司正勝氏も負の七数の重なる七夕が本来は亡き霊を迎える日であったことを理由に、庵室の場での産女の亡霊出現に「その前の場の『夢の場』が七夕の趣向であったのも影を曳いている」という見解を示しておられる（「負の七数」『童子考』白水社　昭59）。

(10)『故事俗信ことわざ大辞典』には「檜の生いしげった山の火事は、檜の枝と枝とがすれ合って発火することがもとでおこり、その檜を焼くことになる。自分の行為や自分の名がもとで自ら苦しむことのたとえ」と解説される。『四谷怪談』では五幕目―夢の場のお岩の台詞「身で身を焦す螢火も、露よりもろきはかない朝顔…」がこれに該当しようか。

図A　鵜の羽
（『八重霞かしくの仇討』）

図B　青女房
（『画図百鬼夜行』）

図D　頼豪
（『画図百鬼夜行』）

図C　青女房
（『百鬼夜行絵巻』）